

主筆 江原萬里

聖書の眞理

第五十七號

七月號

二つの嚴肅なる死 主筆

神を求むる心（下） 江原萬里

神の自現（上） 江原萬里

エレミヤ記の研究 江原萬里

陶工と陶土

世界の平和は如何にして來るべきか

藤本武平二

受難週間の研究 小栗襄三

柏木通信 齋藤宗次郎

祖父の書翰 江原萬里

梅雨は長年續く
私の謙遜なる誇

身邊漫筆

梅雨は長年續く

我が國は全く暗黒中に在ります。農村は借金で呻き、都市は倒産者と失業者が續出し、明日からどうして食つて行くか途方に暮れて居ます。若し日支貿易だけでも順調であつたならば、かくまで窮迫はしないだらうと思ひますが、貿易杜絶だけではありません。兩國間の不幸なる争のため我が國は既に二億以上の歳幣を費し、此の先の失貨は見當がつきません。一體これは何のためですか。

我が政府は滿洲をどうしやうとする積りですか。外國新聞に由れば今にも日露戦争が再び起るやうに書いて居ます。兩國は兵を北滿の境に集めて居ます。浦鹽には兵糧が蓄積されつゝあります。又米國は艦隊を太平洋岸に集中しました。東洋はうづ高く積まれた枯草です。一度點火されたが最後、世界中に燃え上ります。今こそ我々等基督者は此の點火となるべき爆彈の破裂を身を以て防止する勇士とならねばなりません。いつ召命が來るかも知れません。その覺悟がありますか。

實に世界各國が此のやうな暗黒に在るのです。外は國際間の戦争の脅威あり、内は産業の不振、生活の不安、思想の醜惡、道義の頹廢、何日陰雨霽れ、我等は喜々として晴天を仰ぎ得るでせう。私は此の梅雨は晴れないと思ひます、此の後時々々雲間を破つて日光が照射することもあるでせうが、雨は長く續き、多分現代文明の屋臺を腐朽さすまで降り續くかも知れません。

此の觀測の當否は今年開かれる三大國際會議の成否でもわかりません。その第一はドイツの賠償金の輕減延期を目的とするもの、第二

は大戦前よりも擴大され、今では一分毎に一萬圓を浪費して居る世界の軍備縮小を目的とするもの、第三は各國有無相通じやうとせず、互に關稅の障壁を高くして自國だけで生活しやうとする關稅の低減を目的とする會議です。詳しい事はこゝに述べる餘白がありません。此等の會議は大戦争の結果借金に苦しみ、又戦争の再来に脅え、生活不安のため各國自分だけの安全を計らうとする世界の現狀を何とかして打開しやうとする努力であります。果して各國が協力一致するであらうか。現代人は協力一致が大きらひであります。

英國の時評論誌にかく云つて居ます。

どの方面からも現時の危機（佛人は巧妙にも之を信賴の危機と呼ぶ）は何者か常時と異なり、常規を逸し、先例なく、希望なしと見て居る。……一九二八年には何等の危懼をも有しなかつた者も一九三二年（即ち今年）は何の希望も有たない。

今まで幾度か聞かれた國際會議では、こうすればこうなるとの幾分の見込があつた。今では全くその見込がつかないとの事です。世界は底のない沼のやうです。我が國も次第にその中に引づり込まれて居ます。善く泳ぐ者が今に溺れ、金持が一番苦しむ時が來ます。

世の救は政治家、外交家、財政家、學者に由つて來ません。夜益々暗くなつて光明は内から輝き出ます。我等は此から主イエスの御救を経験するでせう。國民が自發的に禁酒をするだけでも效驗歴然です。

假令宇宙が渦卷の中に引込まれて、世の基が悉く破れるやうな事が起つても、そして私共はその中に引入られても、キリストに在る我等の靈魂は安全です。

聖書之眞理

第五十七號

昭和七年七月一日發行

二つの嚴肅なる死

主 筆

去る五月、我が國民は二つの嚴肅なる死に直面した。内閣總理大臣犬養毅氏及び上海派遣軍司令官白川義則男の死がそれである。我等は此の二つの死に對して何を考へるか。

犬養氏は我が國に帝國議會が開設せられた當初から、衆議院議員として憲政の發達に献身的努力をなし來つた人であつて、一時彼は憲政の神と稱せられた。彼の四十年の苦節は遂に酬られた。近年我が國の政黨政治は形式完備し、世界の模範と云はれる英國に倣ひ、兩黨交替して朝に立つ制度

が確立せられた。而して彼自身は多年の孤立逆境から大政黨の總裁となり、その率ゆる政黨は議會あつて以來の最大多數を占めた。實に彼は我が國の憲政發達を一身に表現した者であつた。

然り、而して今彼は得意の絶頂に於て、憲政政治の犠牲に供せられたのであつた。之に由つて我が國の議會なるものは砂上に建てられた家であつた事が明白となつたのである。

由來眞の憲政政治は國民に眞の自由なくしては行はれない。眞の自由とは、各人直接に神に服従する事に由つて、他の何者にもその良心を拘束されない事を云ふのである。故に自ら是とし、義しと信ずる所を死守し、自ら定め同意した法律を遵守することである。爰に眞の自治がある。此の自由と自治となくして憲法政治はない。而して此の者こそはキリストを信ずる信仰の賜物である。

然るに明治維新以來、我が國民は熱心に歐米の

諸制度を模倣したが、其の精神たる基督教を拒絶した。其の結果は視よ、近年政黨の弊が中央に地方政治に瀰漫し、農村と云ひ都市と云ひ、其の害毒はコレラよりも甚しい。内閣總理大臣の死は此の犠牲であつた事は何人も知るところである。

マンチエスター・ガーヂアン紙は云つた。「上海事件なるものは現代文明國の最大愚擧である」と。同種同文、輔車唇齒の關係に在り、最も親善であらねばならない日支兩國國民は殆ど何等明確なる理由なくして多數の兵を動かし、大都市を焚き田畑を荒し、營に將卒のみならず無辜平和の多數の民を殺傷した。その詳細を各種の外國新聞雜誌上に見て、我等は常識ある文明國民の所業と思はれない。正しくサタンの所業である。斯の如くして東洋は益々亂れ、太平洋は波高く、世界の平和は破れんとする。

嘗て孫逸仙が支那の改革を企て、成らず、我が國に亡命して新らしき支那の建設を劃策して居た。一日彼は内村先生の門を敲き之が意見を求めた。先生曰く、支那を救ふものは基督教の福音あるのみ、迂なるが如く見ゆる傳道程最捷路はないと、逸仙之に聞かず、三民主義を標榜して革命を起し、以て今日の中華民國を建設したのである。然かも國內の軍閥の對立鬭争は少しも己まず、人民は疲勞し盡して豚の如くに生き、且つ濫りに排外心を育成して將來の大禍亂をなしつゝある。廣き東洋史よりせば、日本も亦その軍閥の一端ある。滿洲事變、上海事件はその鬭争である。キリストを信ずる信仰を拒み、眞の自由と自治なき國民、神に逆ひ、その枷を毀ち、空しき事を謀る其の責任として、こゝに東洋の指導者たる日本國の司令官の死があつた。

國民よ、嚴肅なる二つの死の前に深思せよ。

神を求むる心 (下)

江原 萬里

三、智からんとの願

實利のため

我等は己が生命を完うする必要上、智慧に富まん事を願ふ。官衙に會社に奉職し、又自ら生業に従事して、自分の業務に關して出来るだけ多くの知識を得度く思ひ、又家庭の生活に於て、子女の教育、家計、治病等に關して愚かでないことを願ふ。更らに我等が困難に陥り、苦しみに遭ふや、之から脱しやうとして智からん事を切に求める。心の中の思ひ煩ひに際しては、その暗黒を除き、光明の入り来る道を求めて己まない。かくして我等は、我等を智からしめる神とその御救の途とを求めるのである。

智慧をすつること勿れ、彼なんちを守らん。彼を愛せよ、彼なんちを保たん。智慧は第一なるものなり、智慧を得よ。凡て汝の得たる物をもて、聰明をえよ、彼を尊べ、さらば彼なんちを高く擧げん、もし彼を懐かば、彼汝を尊榮たはこからしめん。かれ美しき飾を汝の首かうべに置き、榮の冠かんむり辨を汝に與へん、(箴言四・六―九)。

此の智慧は我等に必要なである。それは我等が己が生命を完うするために必要であるばかりでなく、又我等が聖からんがために必要である。我等は何が義しき事であるか。如何にせば思邪なく、正義を行ひ、宇宙の大道を歩み得るか。先づ神とその御意とを知らなければならぬ。我等は如何にせば神を愛し、人を愛し得るか。先づ神が我等を愛し給ふ愛の如何に深いかを知らずしては、我等は神を愛する事も又人を愛する事も出来ない。智慧は人生に必要なである。

されば神を知らずして、我等は眞に人として完くあり得ない。それ故ホゼヤは「此の民は知識なきに由りて滅ぼさる(四・六)」と言ひ又「此の地には誠實なく、愛情なく、神を知る事なし(四・七)」と嘆じた。誠實も、愛も神を知る知識より来る。それ故イザヤは神の御救その國に普偏く、理想の平和が出現する時を歌つて「そは水の海をおほへる如く、エホバを知るの知識、地に満つべければなり」(二一・九)と云つた。我等が生命を完くし、聖くあり、愛の人たるために、即ち我等の救のためには神を知るの智慧は必要である。

好奇のため

加之、我等には天性好奇心がある。此の心があるため、直接我等の利益にならず、幸福とならない事でも、單に物珍らしく、常と異なるものならば、之を見聞きし度く思ひ、その理を究めやうとする。此の好奇心は知らず知らず、我等をして天地

の創造主、我等の靈魂の父なる神を求めしめる。モーセは「その妻の父なるミデアンの祭司エテロの群を牧ひ」つゝあつた時、己が民の苦痛悲嘆を思ひ、其の將來を考へ乍ら、或る日の日没頃羊を牧してホレブ山に來た。折しも夕陽斜に山を射り、日中灼熱した大氣は權木の上に燃え上つて居るやうに見えた。

エホバの使者^{しじ}棘^なの裏^ほの火焰^ほの中に彼にあらはる。彼見るに棘火に燃ゆれどもその棘燬^{しほ}ず、モーセイひけるは我ゆきてこの大なる觀^みを見、何故に棘の燃^やたえざるかを見ん(出、三・一一三)。彼の心は好奇心に燃えた。此の好奇心が彼をそこに近よらしめた。そして彼はそこでエホバの御聲に接した。

哲學は天地に對する驚異から起つたと云ふ。思へば思ふほど不思議なのは、人生とこれを圍繞する世界である。我等が毎日見なれた事柄すら、少

しく深く考へて見れば、一ツとして不思議でないものはない。人の顔が不思議である。その言語が不思議である。眼に見えず、手に觸れ得ず、之を把む事の出来ない人の精神は、その顔に顯はれ、言語によつて傳へられる。人は筋肉の動きによりそれを察する、舌を動かせば空氣が振動し、相手の耳の鼓膜が振ふ。只それだけ。然かも人はそれによつて互に無形の精神を理解し合ふ。

されば此の不思議なる世界は如何にして創造せられ、如何に支持せられ、如何になりゆくか、此の中に生を得たる我とは何ぞや、我はなぜ此の世に生れて來たのか。我等の故郷は何處か。我等は何處に往く。一杯の土饅頭が我等の終りであるのか。此の身死す時靈魂も消えるのか。それとも慕の彼方に今よりも尙輝かしき住家が我等のために備へられて居るのであるか。然り、神はありや。神はあるとしても如何なる神であるか。只物的精

力であるか、只生くる無意識の生命か。それとも我等の如く、否、無限の智慧、能力、愛を以て行ひ給ふ人格ある神であるか。我等が知れりと思ふ此の世界、我、神は果して眞の世界であり、眞の我であり、又眞の神であらうか、若しそうでなければ、我等は夢を見てゐるのか。かく我等の存在そのものに對して我等は只管に眞理を求めぬ。

至上善としての智慧

然かも思へば思ふ程、我等の智慧は淺くして、群育の象を探るやうに事物の眞理はわからない。我智慧をもてこの一切の事を試み、我は智者とならんと謂ひたりしが、遠く及ばざるなり。事物の理は遠くして甚だ深し。誰か之を究むることを得ん(傳道の書七・二三及二四)。

「今までわしは哲學、法學、醫學、尙その上に、噫神學さへも隅なく熱心に學んだが、憐れな馬鹿者、わしはちつとも以前より賢しこくない」とゲ

「テのファウストは嘆いた。そして此のファウストのやうに、我等は人生と宇宙の神秘を知らうとして、益々天地の靈、此の人生の宇宙の奥底にあつてそれを動かす神の直接の啓示を求め。それは我等の生くるための實際上の必要上から出るのみでない、我等が眞理を眞理のために知ろうとする天性の欲求からも出て、智慧の神、眞理の神、天啓の神を求めるのである。

それ故神を知るためには、一切の財産を賣拂ふて、此の最上の眞珠を得やうとするに至る。之さを得ば足れりとする。ロマ教會の理論的基礎の建設者トマス・アキナスが「幸福とは眞理を喜ぶ事以外にない」と云ふたのは夫である。クレメントには智慧が最上のものであつた。

余は敢て斷言する。神を知る事に身を委ねてゐる者は（此の場合グノスチックを指す）、自分が救はれ度いために知識を選び求めて居るのではない：

若し誰かゞ彼に向つて、神を知る事と永遠の救と何れを選ぶかと申出るとしたならば、そして此の二ツは全く一ツであるが、若し分離出来るとしたならば、彼は一寸の躊躇もなく、神を知る方を選ぶであらう。愛することからしてその者を知るに至る、此の信仰の内容自體が望ましくなつて来るからである。

現代人の科學知識

かく迄熱心に昔の人は神を知ろうとした。然るに現代人には此れ程熱心に神を知ろうとする心がない。それは眞面目に眞理を追求する者が少なくなつたばかりでない。彼等の願ふところの「救」が現世的幸福獲得以上に出ないからである。彼等が熱心に求めて居る知識は神學的知識でない。それは法律經濟、農工理醫等の實用の學問である。此の思想の潮流の先驅者は恐らくはアウギユスト・コントであらう。彼は人類の知識の進歩を三

段階に分けた。人類の幼年期は無知妄昧であつて、一切の自然的現象の原因を神に歸する。然るに人類が發達して青年期に入ると、一切の事に疑惑を感じ、何事についても事の理を推究するやうになり、凡ての自然現象を或る原理に歸せしめやうとする。即ち事物の形而上學的解釋をしやうとして、神學時代から哲學時代となる。然るに人類が愈々發達し壯年期に入るや、一切の現象をその有るが儘に觀察し、その原因を推し究め、實證的に事物の真相を知ろうとする、即ち科學時代となる。現代は此の時代に入つたのであると唱へた。然し乍ら科學的研究が如何に精密に行はれたとて、宇宙は顯微鏡と望遠鏡の中に映するだけのものではない。

ホレーシヨ、天地には、お前の哲學で思ひ及ばぬ事をもつとあるよ（ハムレット一・五）。

今や物理學の進歩は次第に物質の本質を物質外

のものに歸せしめやうとしてゐる。所謂物質その物は何の運動もなく、只外から來る力に由つて動くのみである。されば、物質を物質たらしめる力は何處より來るか。

宇宙は洪大である。空間は茫漠として居る。そこにさらに數千億の星も、此の茫漠たる空間に散在して如何にその數の僅小であるか。而して、此等の星は次第に其の熱を空間に放散し盡くし、宇宙の活動は早晚消滅するかの如く思はる。然かも此等の數千億の星、その物質それ自身が自主の活動體ではない。之を創造し、維持し、復活せしめる力は外から來る。それは見る事を得ず、測り知る事を得ない、此の茫漠たる空間の中に充溢するのである。ハラデーの偉大なる發見はそれであつた。近頃アインシュタインの發見した原理も畢竟我等の眼を物質より物質を通じて働く此の見えざる世界に轉せしめたのである。

天然の美とは何か、物質その物ではない。美はしき色彩は物質的に云へば光線の振動に過ぎない。之を美と見るは心である。そして心は無形のものである。非物質である。見ゆる世界をかくおらしめる者は見えざる科學以上の世界である。それが眞なる世界である。之が我等の生命の「生き、動き、また在る」ところ、それを滅亡より救ひ、永生を與ふる力の源泉である。(今年一月發刊ヒツバート雑誌、二二頁。サー・オリバー・ロツヤ宗教と新しき知識參照)。

新らしき知識は之を我等に教えつゝある。やがて「科學の進歩は、それが以前の哲學と科學とに取つて代つたやうに、科學的人生觀は、更らに一段高い宇宙觀と人生觀に代り、新なる智慧が世に提供される時が来るであらう」(サー・ヂエームス・フレザー著、黄金の枝六十九章參照)。我等はそれを求めて己まない。科學は我等に多くの物質的幸福を供したが、同時に我らの靈魂を極度に餓えしめ

た。我等の靈魂は

暗夜に泣く赤兒、

光を求めて泣く赤兒、

泣くより外に言ひすべなき赤兒、(テニスン)

新しき光明を求め、泣き叫びて、「光あれと云ひ給へば光ある」神を慕ふ。若し宗教が此の宇宙を創造し、支持し、攝理し、又完成し給ふ神に關する眞理を知らしめず、人類終局の運命、その救の途について何等の光明をも供せず、我等の靈魂の深刻なる疑惑に對して、明白なる回答を與へないならば、かゝる宗教は無益である。

然し乍ら、嘗て幾度か之に由つて世が一變したやうに「光、暗より照り出でよと宣ひし神は、イエスキリストの顔に在る神の榮光を知る知識を輝かしめんために、我らの心を照し給ひ」(コリント後四・六、「なんぢ等眞理を知らん、而して眞理は汝らに自由を得さすべし」)(ヨハネ傳八・三三)と云ひ給

ひ、神と宇宙と人生に關し再び我等は現代に於て確固明白なる眞理を知る日の來らん事を切に求める。我等は神自ら之を啓示し給ふところの斯る神を求めて已まないものである。

以上私は我等は天性神を求めて已まない心があつた事を説いた。第一は一般的に自己の此の世に受けて生れ出たこの生命を保存し、これを滅亡より安全にし、更らに之を全きものとし發展せしめ度き願あり、次に我等の意志は我よりも偉大なる道德的人格者に依屬し、全く自己の生命を抛げ出して、その命是れ我が意とし、以て全宇宙と我とを一ツの法則の下に在らしめんと願ひ、我等の情は、純眞の愛に愛せられ、愛し、之と一體とならんとして全宇宙と我との間に完全なる一致を願ひ、更らに我等は此の大宇宙の神秘と我等自身の存在、その終局の運命に關して明白なる眞理を知り、そ

の全支配者の聖意を辨へ、全き光明の中に歩まんとする願がある事を説いた。

此等の願は人間が人間として存在する限り、之を喪失するものでない。否、人間が人間として發達するだけ、即ち、その人格が完成に向ふにつれ、それだけ益々旺盛となる願望である。それは肉の慾求でなく、靈魂の慾求であり、肉の死を以て消す事の出来ない慾求である。若し現世に於て之が充分に滿されずば、(そして事實滿されない)。肉の死の彼方に於て滿されん事を願ふ慾求である。人間としてこれ程一般的であり、然かも此れ程深く、高く、偉大なるものはない。而して此の慾求は神に由らずば滿されない。それ故に人間が人間である限り、神を求めて已まない。否、此の慾求を滿し給ふやうな神を求めて已まないのである。

神の自現 (上)

江原 万里

神の存在否定論

人に肖せて創造した神

私は人には神を求める切なる欲求のある事を述べた。此の欲求の如何に根柢深く、如何に切實であるか、之を否認する事は出来ない。然し乍ら、我等に或る欲求があるからとて、必らずそれを満足者は存在しなければならぬと云ふ事は出来ぬ。假令神有りとするも、その神は我等が求めつゝあり、又信じて居るやうな神であるとは限られない。若しかしたならば、我等の神は丁度貧乏人が百萬長者になつたと空想するやうに、我等自身の欲求が書いた一つの映像ではあるまいか。昔ギリシヤのクセノファネスは云つた。

人々は、神は生れ、感情を有ち、聲と形とを有つと思ふが、若し馬や牛が人のやうに書き得たならば、彼等も亦彼等の神を彼等自身の像に肖せて造るであらう。

近代に於て最も雄辯に此の事を主張したものはホイエルバッハである。彼の説はベーゲル以後の獨逸の思想界に多大の影響を與へ、ストラウスのイエス傳となつて基督教を根こそぎにしやうとし、マルクス及びエンゲルスの所謂科學的社會主義となつて、只單に基督教のみならず、一切の宗教を悉く阿片とするに至つた。

ホイエルバッハはその著基督教の本質 (*Wesen des Christentums*, 1841) で論じて云ふ。神は人間の欲求の産物に過ぎない。それ故神は人間以外に獨立の存在を有するものでない。人間の性質中の無限性、それが神である。即ち各個人中に普遍する「人」それが神である。何となれば、各人の有する

神の觀念を精確に分析し、検査する時、それは畢竟人類一般の性質の反映に過ぎない事がわかる。人間的の欲求が映寫した畫像を、人は神として、宛かも人間と相對立するかの如く之を拜するのである。

だがそれは人間以上に高く存在するものでなく、各個人の心以上に廣くその周圍を圍繞するだけである。一般に人間が發達し、その思が廣くなればなる程、神は益々廣く見える。深くなればなる程愈々深く感ぜられる。然しそれは人を離れて存在する神の發見でなく、人類の思惟、感情、道徳が廣く、深くなつたため、その欲求を滿す者として畫く神が向上したのである。されば創世記にあるやうに、神が己が像に肖せて人を創造つたのではない。人が己が像に肖せて神を創造つたのである。「汝が求める物、心の中にある欲求、それが、そののみが汝の神である」。

然らばホイエルバッハの思惟する人とは何ぞ。彼は有名な語を遺した。曰く「人はその食へる食物である」。Der Mensch ist was er isst. 澤庵を食へばそれがその人である。鯛を食へば鯛がその人である。「此の肉體、その總體が私の我である。私の精髓である」。

あゝ、神は眞に我等の欲求を滿し給ふところの我等の上に存在する人格者でなく、單に我等の欲求の映像に過ぎないであらうか。然かも我等は只その食へる食物にして、其の胃袋に入つた澤庵、茶漬、西洋料理が消化して成つた物質の欲求、それが神であるのか。我等は眞面目に之を駁論する勇氣もない。然し乍ら現代に於てマルクス主義者は大眞面目にそれを信じ、又一般民衆の神も亦かゝる神である。

その異論たる理由

一、ホイエルバッハは、神は人の欲求の產物で

あるから神は獨立に存在しないと云ふ。之れ明かに論理をなさない。人は己が衷心の欲求を満し給ふべき神を求めつゝある。その事からして神は必ずあるとは斷言出来ないであらう、たが、其の反對に、人が求めて居る故に神がないとは如何にして云ひ得るか。寧ろ人が切に求めてゐるのは、それに對應する何者が存在するからであると考へる方が至當ではあるまいか。

我等が飢えて食を求め、それは食を得ば飢は満されるからである。我等の心に欲求が生じた事は、それを満すべき者が宇宙の何處にか存在するからではあるまいか。若し此の宇宙何處にも何の満すべきものなくして、然かも我等をしてそれを求めしめる心ありとせば、然り、我等を飢えしめ、渴かしめて、然かも之を醫すべき何者もないものならば、此の宇宙程無情冷酷のものはない。果して世界はかくも無情冷酷に構成されて居るものであ

らうか。我等の全生命は否と答へる。されば我等に神を求める欲求あることは神のあることの一つの證據とこそなれ、神の無い證據にはならない。ホイエルバツハの議論とこれに影響せられて成つたマルクス等の排神論は奇論と云はねばならない。

二、神を人の欲求の創造物とするホイエルバツハは、神の子、キリストを信じやう筈はない。彼はキリストを人間の想像に由る架空の人物とする。彼は又預言者たちが自己よりならず、神より直接受けたと確信する神の啓示を、預言者自身の性情及びその欲求の發言であるとする。無理はない。パウロは云つた。「聖靈に感ぜざれば誰もイエスを主なりと云ふ能はず」である。

自ら心に神を感じない者が、神の御言を人の言と判別出来やう筈はない。マツキントツシ教授の云ふやうに、宛も赤色の色盲が赤色と他の色との區別が出来ないと同様、又諸讒を解しない者がそ

の言は解つても、戯談の面白さはわからないと同様に、預言者の言が言であることはわかるが、それが神から來た意味は、耳ある者以外にはわからない。

三、然のみならず、ホイエルバッハにせよ、又マルクス主義者にせよ、彼等は人間の中にある罪を視ず、死は人間の罪の結果である事を解しない。人間の心の腐敗、墮落が如何に神の光明を阻止するか、その結果死が來るか、然かもそれにも拘はらず、神の御救は人間の心の此の暗黒内に入り來り、彼を罪のどん底から救ひ、死滅より生命に立ち還らしめるか、自ら之を経験しない者に神の存在はわからない。

四、ホイエルバッハは宗教そのものを排斥せず、人間が自己の欲求に無限性を賦與して之を神なりとして拜することは、人間を幸福ならしめるために必要であると云つた。神は人間の幸福の手

段として創られたものと見るのである。然し乍ら、人が神を創造したのではない。神が人を創造し給ふたのである。その神は我等の欲求を満し給ふと雖も、神は我等の僕でない。我等の主であり給ふ。我等の幸福のために存在し給ふのでなく、神御自身の榮光のために、即ちその正義と愛を發揚し給ふために、世界を創造し、人類を創造し、之をその墮落から救ひ給ふのである。人は只神の絶對の尊嚴、その恩恵の前に己れ全部を献げ、その榮光の具とせられる以外の何物でもない。

かく神は、我等が欲求を満し給ふ者として、我等が神を求めると求めざるとに拘はらず、獨自の目的の爲めに存在し給ふ。されば若し神にして、眞に在し給はゞ、我等の此の欲求に應じ、又は欲求のある前に、既に己れ自らを我等に現はし給はないのであらうか。(以下次號)

エレミヤ記の研究 (十)

陶工と陶土 (下)

江原 萬里

人の自由と神の全能

我等の意志は自由である事は我等の生活経験で明かである。我等は語らんとして語り、語るまじとして黙する。此の自由を以て我等は憎み、怒り、

傷け、奪ひ、種々の悪を爲す。我等に罪がある事も事實であつて、之を否認する事は出来ない。之は或る者の考へるやうに、單なる心の迷ではない。又罪は外側から加へられる力の大きさと方向とに由つて定められた運動ではない。現在ユダの國は國民の内側なる心の腐敗、その罪に由つて國家的又宗教的組織が崩壊しやうとして居るのである。エレミヤは此の現實を直視した。

然れども、他方、エレミヤは日々祈つては其の御聲に接し、親しく靈に於て交はるイスラエルの神エホバの存在を疑ふ事は出来なかつた。彼がエホバを知り、其の神なる事を信することは、當時何人も彼に及ぶところではなかつた。彼には他の何者を虚偽とするとも、日々親しく御聲に接するエホバを虚偽とする事は出来なかつた。幾度か神を疑ひつゝ、結局人生の最も確實なる経験は神の存在であつた。

神エホバはイスラエルの民を聖別して特に神の民となし給ふた神である。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、即ち永遠にイスラエルの神たる事を約束し給ふた神である。然るに若しイスラエルの民が己が自由なる意志に由り、神に背き、其の聖き律法に服はず、悪を行ひ、國を滅ぼすとせば、神は果して神であり給ふであらうか。神が神であり給ひ、全知全能、且つその約束に誠實で

あり給ふならば、此の民を罪から又滅びから免かれしめ給ふべきではあるまいか。

然るに若し、神がそのためにエレミヤを遣はして、罪の悔改をなさしめんとし給ふならば、神のその御旨はイスラエルの民の頑固なる背反に由つて明に失敗に歸した。然らば全知全能の神に果してかゝる失敗があり得べきであらうか。そも亦神は豫じめかゝる事の生ずるのを預知して居給ふたのであらうか。或は全く神の豫期に違つた事が生じたのであるか。

エレミヤはユダに遣はされた神の預言者として此の大問題に直面したのである。實に人間の自由對神の全能、人間の背反對神の御旨の成就の問題は、實にエレミヤ個人の重大問題ではない。我等神の全知全能を信じ、然かも我等の靈魂の奥底に内在する罪、神に對する服従拒否の心がある事に目覺めた者にとつては、之は千古の大問題である。

ミルトンは失樂園で歌つた。ある一群の人々が

引き退きて小山に座し、

遙に高き想のうちに、

攝理と預知と意志と運命と、

定まれる運命と自由なる意志と、

絶對の預知とを高らかに論じ、

盡くるを知らず、霧中を辿りぬ。(二・五五以下)

我等はロマ書第九章より第十一章を讀む毎に、常に此の事を感ずるのである。

神の絶對的自由

エレミヤは此の大問題を胸に懷いて、疑惑と失望とに閉ぢこめられた。不圖、或る日、彼は思ひ當るところがあつて寓居を立ち出で、エルサレムの東側なるヒンソンの谷を下りゆき、そこに在る陶工の家を訪づれた。こゝで端なくも彼は大光明に接したのである。

彼がこゝで接した光明は、各方面に感化を及ぼした。ヨブ記、第二イザヤ書、ソロモンの智慧、パウロのロマ書より、近くはブラウニングのラビ・ベン・エヅラに至るまで、明かにその影響を看取し得る、と「エレミヤの根本思想」の著者ジエフアンソン氏は云ふ。此の問題について、今日に至るも二千六百年前エレミヤが感じたそれ以上直裁に、此真理を云ひ顯はす事は出来ない。實にそれは舊約文學中の光彩であり、凡ての宗教文學中永く人心に刻印せられる寓話であつた。エレミヤが此の光明を回顧して、陶工訪問を神の命によつたと書いたのは、さもあるべき事である。

彼はそこで陶工が忙しさふに、陶土をこねて之を上部の車だけが回轉する轆轤の上に載せ、足を踏みならして轆轤を廻し乍ら、之を一定の型に造り上げて、陶器を製造して居る様を見た。

まことに平凡なる、何人もなし得る仕事であつ

た。然もエレミヤが此の單純なる勞働を見つめて居た時、千載の下今尙清新なる大思想にうたれたのであつた。之は實にインスピレーションであつた。神の靈が直接人間の靈のうちに降り來て、神の御こゝろを啓示したものであつた。

一體エレミヤがその生涯に度々得たインスピレーションは、神殿の儀式參列、大説教聽聞、又は萬卷の書を披見する事に由らず、平凡なる日常生活裡から得た。嘗て臺所の鍋が沸き騰つつを見て北禍來を感じたやうに、今、彼は圖らずも此の平凡なる陶器製造のわざに、神と人とに關する大真理を發見したのである。

由來大問題に沈思しつゝある者は、極めて平凡なる事に由つて、大真理を發見するものである。卵を半熟にしやうとして、卵の熟する時間を計るために渡された時計の方を湯に入れ、卵を手に載せて之を長いこと見つめて居た程、或る物理學上の

難問に心奪はれたニュートンにして、始めて林檎の落下するのを見て、萬有引力の大法則を發見したのである。又アルキメデスは、王命によつて黄金の冠が果して純金製なりや否やを確めやうとして沈しつゝ、あつた故に、偶々入浴中自分の手が湯から浮び上つた事から比重の原理を發見した。

彼は驚喜して思はず知らず、浴槽を飛び出し、「わかつた、わかつた」と云つて裸體のまま、市中を歩いたとの事である。常に胸中に何か宇宙的大問題を抱懷せよ、然らば極めて平凡なる日常生活に千古の大真理を發見するであらう。

エレミヤは、陶工が轆轤にかけて、陶土を種々の型に造りつゝ、あるのを見つめて居た。偶々土が軟かすぎたか、或は固すぎたか、それとも他に何かの故障があつて、出来損じが生じた。これを見た陶工は無雜作に之を潰ぶして元の陶土にかへし、且つ極く自然に再び之を取出し、轆轤にかけて、

それからして陶工の思ふまゝなる別の器を造り上げた。之を見た瞬間、エレミヤは一道の光明にうたれた。

時にエホバの言、吾に臨みて云ふ。イスラエルの家よ、此の陶工のなすが如く、吾、汝をなし能はざるか。視よ、陶工の手に陶土の在るが如く、汝等は我が手中に在り。(一八・五及六)

ユダヤの民は己が有する自由を濫用して罪を犯し、神の御旨に副はなくなつた。然し乍ら彼等の罪を以てして、神の御旨は破らるべくもなかつた。彼等は神の御手より離れることは出来ない。陶土が目的に適合せずと見るや、陶工は無雜作にその陶土をつぶして元の土塊の中に歸したやうに神はユダの民を滅ぼし給ふのである。それは神に於ては絶對の自由である。神は最初の目的を達成し給ふため、その障害物は悉く排除し給ふ。

然らば陶工によつてつぶされた土塊は如何にな

るであらうか。陶工は再び之を取り上げて、新に己が意に適合する別の器に造りかへたのである。

神が全知全能、且つ正義の神であり給ふならば、神の御旨に反するものは悉く之を除き去り給ふのは當然である。然し乍ら、神の正義はその約束に誠實である事である。そしてその約束が恩恵の下賜であるならば、舊きイスラエルの誇を悉く打ち摧き、その背戾を罰して國を滅ぼし給ふ神は、その罪の故に之を永久に打ち棄て給はず、潰された價値なき土塊から、之を昔に優つて御旨に適ふ器に造り上げ給はないであらうか。

我等の罪に必ず罰ある正義は恐ろしい。然し乍ら、罰し給ふ者が全知全能の神であつて、無情冷酷なる運命でないならば、神は絶対的自由なる且つ人間の至上善なるその御意に出つて、我等の罪を赦し、更に之に榮光を賜はらないであらうか。

エレミヤが此の時之感じたか否かは、エレミ

ヤ記の此の記事に由つては之を知る事は出来ない。やがて夫が太陽のやうに彼の悲痛なる心を照すであらう。私は後之を述べる。此の時エレミヤが陶工の家に於て明白に知り得た真理は、ユダの國は神の御手から少しも離れることが出来ないと云ふ事であつた。彼等が如何に勝手に神に背いても、尙ほ彼等は神の御手の中にある。而して今や彼等が罪を犯したれば、神は之を元の土塊に歸し給ふと云ふ事であつた。

預言者の眞意義

爰に於てかエレミヤは預言者たる己が任務を明白に意識した。それは神がその民を悔改めしめやうとして彼を遣し給ふたのではない。國民がエレミヤの亡國の預言を聞いて悔改めず、益々罰を犯し、滅亡に急ぎつゝあるのは、神の御意が成就しないのではない。否、成就しつゝあるのである。

神はイザヤに命じて「なんぢ、此の民の心を鈍くし、その耳をももうくし、その眼をおほへ」(六・一〇)と云ひ給ふた。神の御言は罪人の心を益々頑固にする。かくて滅亡は必至不可避となり、罪の結果のごんなに恐ろしいか。神の正義とその刑罰の如何に嚴肅であるかを明にする。さればエレミヤは、自分が預言者として召された真意義は民の悔改になく、その罪に對する刑の宣告をなすにあると云ふ事を確信するに至つた。

福音が全世界に宣傳へなければならぬのは、必ずしも全世界の人類を悉く救はんがためではない。パウロは云つた。「救はるゝ者にも、亡ぶる者にも、我らは神に對してキリストの香ばしき馨^{かほり}なり。この人には死よりいづる馨となりて死に至らしめ、かの人には生命より出づる馨となりて生命に至らしむ(コリント後書二・一五—一七)と。

イエスは世を救はんがために來り給ふた。然し

乍らそれは又世の審判であつた。「神その子を世に遣し給へるは、世を審かん爲にあらす、彼によりて世を救はんが爲なり。彼を信する者は審かれず。信ぜぬ者は既に審かれたり……すべて惡を行ふものは、光をにくみて光に來らず……眞^{まこと}を行ふ者は光に來る」(ヨハネ傳三・一七以下)である。

神がエレミヤをユダに遣し給ふた直接の目的は、其の預言に由つて彼等の心を益々頑迷にし、民を滅ぼし給ふためであつた。君神の御言を信じないか、それは君の自由である。而して又神の刑罰である。之が人間の自由意志に兩立して矛盾せず、然かも之を支配し給ふ神の御心である。エレミヤは今も充分に之を納得することが出來た。

マゴール・ミサヒブ

彼は陶工の家から徳利を買ひ求め、民と祭司の主たつた者數人とを伴ひ、ベンヒンームの谷の陶

工の家の上に在る「陶人門」にゆき、遙か彼方の谷底目がけて徳利を抛り投げた。それが落下して粉な微塵に摧けたのを見て、彼は長老たちに、エルサレムの町はやがて此の徳利のやうに棄てられ、微塵に摧けるであらうと告げ、エルサレムに立ち歸り、神殿の庭で再び同様の預言をした。

此の時は神殿の衛士の長であつたらしい祭司バシユール之を見て、エレミヤが前の大不敬にも性懲りず、又もや此の振舞をなすのを怒り、彼を捕へて、安寧秩序の妨害の廉を以てベニヤミンの門の桎梏あしがびに繋いだ。エレミヤの友人なる牧伯つか之を聞いて驚き、その釋放を求め、翌日に至つて漸く釋放された。

此の迫害に遭つた。エレミヤの意氣は少しも衰へない。桎梏あしがびから釋かれるや否や、バツシユールを面罵して云つた。

エホバ汝の名をバツシユールと稱はずして、マゴル・

ミサビブ（四方はつほう八方ふさがり是恐怖）と稱ひ給へり。そはエホバかく云ひ給へばなり。「視よ、吾なんちをして汝と汝りすべての友との恐怖たらしめん。彼らはその敵の劍に斃れん。汝の眼之を見ん 吾、全、ユダ、國、を、バ、ビ、ロ、ン、の、手、に、付、さ、ん。王は、彼、等、を、バ、ビ、ロ、ン、に、流、囚、と、し、劍をもて殺さん」と。バツシユールよ、汝と汝の家の者は皆捕はれ、汝はバビロンにて死なん。

(二〇・三一六)

之を聞いて憤激と恐怖交至りし、バツシユールの顔色こそ觀物であつたであらう。

エレミヤは今までも幾度も國の滅亡を預言したが、未だ嘗て國は如何にして滅びるかを語らなかつた。此の時始めて國はバビロンに滅ぼされ、民はバビロンに流される事を明言するに至つた。今やアツシリヤは既に亡び、バビロンが新に北方に興りつゝあつた。此の預言を解するには、メギドンの戦以後國外の事情變化を語らねばならない。

世界の平和は如何にして

來るべきか

藤本武平二

國は國と、階級は階級と、友は友と、然り、夫は妻と、親は子と、或は戦ひ、或は争ひ、或は反きつゝある。而してこれ等の闘争は生存の爲めに、或は正義の爲めに、或は罪のために起るものであつて、生物界に於ける自然法則と道徳との嚴存する限り、その當然の結果として絶えず起らざるを得ないのである。かくと知つて、吾々はこの世に何の希望も光明も發見し得ないのである。誠に吾々は物質的生命と良心とが與へられたばかりに、却つて世は淋しく暗く望みなく平和なきものとなつたのである。

吾々は不義を黙過してまでも平和を愛好するも

のでない。良心の所有者として立つ時、人は正義の熱愛者となるのである。而して不義を見ては寸毫も假借する處なく、戦争に訴へてまでも之を排撃せんとするのである。故に神なくキリストなく愛なき一般の人々が多數を占むるこの世に於て、戦争或は闘争の止む事なきは當然である。

然し茲に残された世界平和を成すべき唯一の途がある。曰くキリストを受け入れて、國として又階級として又友として又夫として妻として或は親として子として、神の前にその不義を悟り、罪を悔ひ、神と和らぎ、十字架の贖ひにより神に義とせられて、神の愛に居り、敵をも愛するの心を與へられる事である。各自の生命も肉體も所有物も天も地も悉くが是れ神の屬である事を知つて私をせざる事である。かくて凡ゆる争闘も不和も戦争も其跡を絶ち、國境は撤廢せられ、人種の別は忘れらるゝに至るであらう。異國人相隣りして相愛し

相扶け、聲を合せて神を讚美するに至るであらう。かくして各國人は世界何れの處に至つて住むも良く英人も米人も佛人も日本人も朝鮮人も支那人も黒人もアラビア人も世界の好む處に住居し愛の生活を樂しみ得るに至るであらう。かゝる時吾々は全世界を各自に與へられたといふ事ができるであらう。世界を征服して統一し其手に收め得たるに優りて世界を各自の手に、然り萬國民の手に與へられるのである。

神はその創造の大業に着手し給ふや、先づ天地を造り生物を造り人類を造り、最後にキリスト・イエスを遣はして其愛を示し給うて、その大業を遂げ給うた。然るに千九百有餘年の後に至るも人類はキリストを受けずしてまだ鬭争を繼續しつゝある。神の大經綸は今や既に成つてゐるのである。永遠の義なる平和は世がキリストを受ければ今日直ちに來るのである。若し世がキリストを受けざ

れば義戰を幾百度戰ふとも又幾百十年を待望すとも眞の平和は來ないのである。

吾々は知る、キリストを受けざる日本が今日滿洲の野に於て戰ふは當然である、故に吾々は今は戰争不可避論を唱へざるを得ない。キリストを受けざる限り如何なる國家と雖も、特殊の事情なくして非戰論を唱ふるは不可能である。國際聯盟と雖もキリストなくして非戰論を唱ふるは不可能を強ゆるものである。

受難週間の研究

(四)

強 盜 の 巢

小 栗 襄 三

前日の入城に依り具にエルサレムの神殿を巡視せられしイエスは、その現場を目撃され事態の餘りにも重大なるを心痛し、彼の朝の祈りは熱せざるを得なかつたのであらう。再びエルサレムへ向はれし彼は飢ゑ給ふてゐた。遙に葉ある無花果の樹を見て、果をや得んと其のもとに到り給ひしに葉のほか何をも見出し給はず、茲にイエスは樹に對ひて言ひたまふた。「今より後ちいつまでも、人なんちの果を食はざれ」と。

斯して彼等は都に到り神殿に入り給ふた。(フルダ門よりか、キボノス門より乎)

時のヘロデの神殿は莊麗を極め、その建築に費

されし歲月は既に四十六年の長期に渡り、(完成迄八十餘年を経たり)熟練工の使用人員實に一萬人に及び、アウガスタス時代の建築美の粹は集められ、モリヤ山上を覆ふ白亜の城として四方の山々を壓し、東方モアブ連山より曉を破つて昇る旭日に、その城姿の浮ぶ態は、空中樓閣の出現を想はしめ、當時の人をして「ヘロデの建築を見ざる者は未だ美を見ざるなり」と叫ばしめし程であつた。控門を打過ぎて城壁内に入れば、四方は回廊が廻らされ、その南側に王の廊と稱ばるゝ通廊あり、これを支ふる百六十二木の一基石よりなる大理石の支柱はコリント式に刻まれ、又黄金に鏤められて林立し、屋根は彫刻の施されしレバノンの香柏にて葺れてゐた。東側はソロモンの廊にして二重の柱廊よりなり、前者に劣るも美はしきものであつた。

この兩廊に接する矩形の中庭は、賣買する者、

兩替をなす者、牛・羊・鳩を賣る者等の群る處であつた。

此處にイエスは立たれて、繩で作りし鞭を持ち、羊をも牛をもみな宮より逐ひ出し、兩替する者の金を散し、その臺を倒し、又器物を持ちて宮の内を過ぐるを免し給はず、彼は教へて言ひ給ふた。

「わが家は、もろもろの國人の祈の家と稱へらるべし」と録されたるにあらずや、然るに汝らは之を「強盜の巢」となせりと。

誠に神殿の外観は莊麗を極め、儀式を司る僧侶の衣は威嚴に満ち、朝に夕に行はるゝ儀式は嚴格なるも、内容は空虚なる白く塗りたる墓の如く、祈の家は俗化し、信仰も儀式も形式に流れ、彼等は己が地位の確保と、生活の安住のみに汲々とし、その舌には詭計あり、口唇のうちには蝮の毒あり、その口は人を殺す詛と苦とにて満ち満ち、愛する

事疎く、恰も神の權威あるかの如く人を裁きて憚らず、又神に献げし聖物をして己が慾を満し、人の救はれんとの切實なる願望を利用して私財を肥して飽く事を知らず、寡婦のレブタ迄をも搾取し終らざればやまず、祈の家に來る者の敬虔なる信仰を金錢に換へしめて、それを強奪する者の住む處。又神殿内にて商賣をなす者等は、神に献げんと一年、二年、或は數年間、額に汗して獲し金を貪り取らんと、神に備ふるもの高利に賣付けて、一厘なりともヨリ多く利益に與らんとして、祈の家に來る者に、蠅の物に着くが如くに群り、相互にせり競ひて、價高き金銀を掠めんとす。

聖なる宮が斯る者等の巢窟となるならば、その建築が如何に美はしく、その儀式が如何に莊重なりとも、又その教へが如何に崇高なりと云と雖、「荒す惡むべき者」の聖なる處に立ちて、神の宮を強盜の巢になすに外ならない。

この現場の真相を知るイエスは、父の家が斯く成果てしを默許し能はなかつた。羔の怒は遂に鞭となつた。破壊に非ずして鞭となつた。

もし彼の怒を以て徹底的に神殿を破壊し去らんとせば、一言にて無花果の樹を枯らし、又荒れ狂ふガリラヤの湖水を鎮め給ひし力を示して、神殿の基礎石よりこれを覆すは最と容易き業であらう。

彼の狂暴なる侵略者、新バビロニヤ帝國の大帝ネブカトネザルのエルサレム破壊を見よ、その城壁の礎は壞たれ、神殿、王宮は灰燼に歸し、聖物は悉く掠奪され、王を初めとして主要人物は捕虜とされ、又逆殺され、モリヤ、シオンの兩山上は一朝にして廢墟と化し、残るは貧者と農夫のみ淋しく殘灰中を彷徨ひしに非ずや、又ロマ帝國のベスパシヤン帝の子タイタスの紀元七十年に於けるエルサレムの破壊を見よ、神殿の礎は一も残らざる迄に打ち壞たれ、焼かれ、逆殺されし者の數六

十萬人、その死屍は累々として山積し、酸鼻を極めしに非ずや。罪の子等にして然り、況して神の獨子の能力に於て然らざらんや。

彼は神殿を破壊し給はなかつた。繩の鞭にて潔め給ふた。これは彼のなし得る最小限度のものであつた。怒の中に愛の鞭を三し給ふたのであつた。破壊は簡單である。神の御手を待たずして罪の子等の手にてなし得る。併乍ら眞の建設はイエスの鞭に依らざれば完成し得ない。神の聖なる宮に於て然り、又我等が罪の肉體に於て然り、姦惡なるこの肉體を、聖靈の宮となすには、イエスの愛の鞭に依らざれば、これを潔め、又聖別する事は不可能である。主の名によりて來りて王の入城と、彼の鞭による潔めと、彼の苦難と、十字架により完全に主偕に宿り給ふに非ざれば、強盜の巢は畢なる處とはならない。夕暮も近づきイエスはベタニヤに歸られた。これは月曜日の出來事である。

柏 木 通 信 (第十九信)

齋 藤 宗 次 郎

全集臨時編輯室 主の命とあれば何處へでも行く。全集の編輯は五月上旬頃から自然に郊外杉並町なる鈴木氏宅に移された。時間の經濟と事務の進捗に就て委員會合の便宜

による臨時の措置に相違ないが、聖靈の御護りの下に祈と靜肅とを以て始終する點は、敢て柏木の本陣と異なる所はない。生垣の外には麥浪の黒土を渉るを見、北隣の茅屋を圍む幾千本の吳竹が可憐の音を響かし來るを聴く。机上の原稿を檢しつゝ、約百記の綴られし場所は何處なるか、亞歷士書の書かれし地は、何處なるかなど三千年前の歴史の中に心身を投げ込んで靜かに神の聖業に當る。暫時にても此塵外境を往くは何たる嬉しさぞ。お茶を告ぐる三時の席に大福餅を前にして互に無邪氣を語り、腹底を拂ふ哄笑を擧ぐる時に始めて現代昭和の人となる。何時まで此處に働くのか我等は知らない。

日曜日の集會

一、基督教の眞髓

永 井

- 一、國難に處する我等の態度 名 古 屋
- 一、晩春の天然に對する感想 鈴 木
- 一、世相と信仰 寶 田

神の愛によつて集められし兄弟姉妹は各自の信仰の量に應じる新しき讚美と切なる祈禱とを捧げし時に、神は其選びし者の靈を透して眞理の糧を豊かに與へ給ふた。誠に感謝の至りである。

柏木の近狀 天然は神の法則を守つて變ることはない。會て恩師が屢々天啓を蒙るに際し、之を助くるの材料として用ひられし邸内の諸種の草木は、時に應じて莖葉花果の美觀を呈し、絶えず神の力と恵みとを示して居る。退院後日一日と健康を恢復せらるゝ、恩師夫人には。回想の感懐と前途の希望に聖恩を感謝しつゝ、全集の刊行と祐之博士の稀有の好譯著「天才人」の上様に盡きざる欣びを持たれつゝ、ある様に見受けらる。

綠雨の三溪園 横濱櫻木町驛を登して疾走し來れる自動車から降りて見れば、此處は綠雨に煙る三溪園。往年の大震災を免れて悠々百年の音を愴みなく物語るの地。會て恩師はキャプテン山崎氏と共に曳杖を試みて激賞搭がざりし所、余は先づ徐ろに數歩を進めて池畔に全景を大觀するに

幽邃閑雅なる純日本の風光は、淺薄なる歐米風の侵入誘惑を斥けて、特恩保存の權を守る力に言ひ難き喜びを感じた大島老先生を始め二十餘名の教友等此靜境を傷けんことを恐れ、低聲を以て語り合ひつゝ、丘上に聳ゆる古塔綠蔭に憩ふ邸屋を眺めた。迂曲せる小徑を辿りつゝ、今を盛りに咲きほこる躑躅の燃ゆる光に觀賞の眼を留めた。小溪に基布する奇岩怪石に注意を拂ひつゝ、段級を踐み松林を過ぎて不知不識の間に懸崖の頂に達した。然るに視よ、忽ちにして境涯一變し今は本牧岬頭より太平洋の際限なき海原に對するのである。斷崖百尺の脚下を臨めば大小の海波岸を撃つて壯快の響きを擧ぐ。余は溪園の靜を愛して海洋の動をも棄つることは出来ない。何れの景を透しても神の恵みと力とを拜することは出来る。僅々時餘の間に此變化多き大自然の懐に入つて得難き經驗を味ひたるは大なる感謝であつた。諸兄弟等しく面上に怡悅を湛えて此境を距つた。

無名會其一 五月八日午後三時柏木の教友約三十名横濱山手町なる山榭兄宅に集つた。例によつて指導人物もなければ活動の中心も見えない、勿論名稱もなき會合であつたが主在る我等の心には先づ満足と感謝とは湧いた。推されて司會の任に就きし古屋氏の指命によつて起ちし數名

の感想は眞摯にして剴切のものであつた。一同の歡迎に包まれし大賀氏は東京名古屋滿洲に於ける三十年の經歷を語つて攝理の尊きを痛感せしめた。藤木氏の感謝の祈禱は誠に善く各人の信念を代表せるものであつた。神の教會の存在は此世に於ける一大奇蹟である。晚餐の饗に預りし後山榭兄夫妻の深き好意を謝して九時各々歸途に就いた。

無名會其二 晩春の一夜神田駿河臺女子基督教青年會館の四階の廣間に淺野持地大賀(同夫人) 黒崎畔上(同夫人) 三谷蒲池佐藤道正植木石原高山山榭(同夫人) 田中坂田南原鈴木矢内原久山池田齋藤森田秋野澤野藤澤若林藤本の三十名集會、各々キリストの爲に選ばれて十字架を負はせられし人々、時は時なるが故に、各自の信仰主の力に燃えて眞日本の爲に愛國の涙流る。忌憚なき所信の表白は鐵筋の堂屋を揺がし「教會の本質」を説く集會の準備の祈禱は、日本と世界の將來を光明に導く豫感を覺えしめた。何を語り何を祈りしかを茲に記さない。見えざる御手に支へらるゝ此會合が長く俗人の耳目に隠れんことを望む。去れど此處を通して興る生命が愛する國民と人類とを祝福するに至らんことを祈る。藤木氏の閉會の祈禱は嚴かに獻けられた之を主催し美味の夕餉を以て各人を喜ばせし大賀氏夫妻に

一同謝辭を述べて十時散會した。

黒崎氏講演會

五月廿五日夜日比谷公園市政講堂に開催

三谷氏司會矢内原氏の開會の辭の後「教會の本質」と題する黒崎幸吉氏の講演に入つた。一時生死を氣遣はる、程の大患を煩はれし同氏が、堂々たる軀軀と血氣漲る顔貌とを以て壇上に立たれし時には、三百餘の聴衆の多くは感涙を以て此使徒に對し一齊に敬愛の視線を放つた。氏は全然聖書の明示する所に順ひ、神の教會は神の豫定によつて創められしものなることより説き起して基督と教會との密接なる關係に及び、基督の出現と共に凡ての制度儀式信條僧職悉く不用となり、只神の愛基督の十字架の生命に生くる靈の教會である。是れ我等の所謂無教會であつて其自由其獨立の特性は眞に絶大無比と稱すべきである。我等が之を宣べ傳ふるは全く聖靈の恵みによる單純の愛の活動に外ならないと結んだ。平明透徹聖書の教ふる所を其儘に述べられしものであつた。九時力の限り父なる神を讚美して散會。

洗足會

五月は獨立堂階上恩師の遺臺の下に開かれ、六

月は杉並の余の宅に紅熱の苺畑を前にして開かる。共に主の命じ給ふ所に違ひ神の尊きを言葉を味ひて散す。

私の謙遜なる誇

主 筆

私は過去の生涯を顧みて、特別に神に愛せられ、又特別の御用に選ばれて居ると云ふ感が益々深くなる。人は何と思ふか知らないが、私自身明かに神の聖手が私を導き、エジプトを脱せしめ、紅海を渡らしめ、四十年の曠野に、晝は雲の柱、夜は火の柱となつて私に先立ちゆき給ふ神の御手の跡を見る。それ故私は只その御導きに從へばよい。人生の浮沈、禍福、外なる事情の變化に拘はらず、只神の爲し給ふところを最善として只管之に服へばよい。

世に傲慢程悪い者はない。富を誇り、位置を誇り、才能を誇り、知識を誇る。此の傲慢中、靈的傲慢は最悪である。自分の信仰を誇り、聖淨を誇

り、自分のみ天國に入る資格ありとする。神の憎み給ふ者にしてかゝる者の如きはない。「禍なる哉、僞善なるバリサイ人よ」である。然るに私が自分は特別に神に愛せられて居ると云ひ、殊に特別に神の御用に選ばれて居ると思ふのみでなく、かゝる事を口外にするのは此の靈的傲慢のやうであるが、決してさうでない。又若しそれが事實であるとせば、神は偏頗であり給ふやうに思はれるが、決してさうでもない。

神は何人をも平等に愛し給ふ。然し乍ら、神の平等は共產主義者の平等と違ふ。平等の愛とは各自に夫々バン一斤、肉半斤を興へることではない。神はその人々の個性に應じ、境遇に適合して愛し給ふのである。爰に於てか私の愛せられやうは、他の人のそれと同じではない。それ故私は特別に神に愛せられて居ると云ふのである。

又人は各々その性格と天賦の能とを異にする。

神は人を皆一等卒に又は上等兵に創造し給はない。或は手とし、或は足とし、或は胃とし、或は肺とし、或は頭たらしめ給ふ。手は手として特に選ばれ、足は足として特別の御用があるのである。若し手が足の用をなし、足が手たらんとせば、それこそ傲慢である。足が足たる特別の選びを自覺し、その用に忠實たらんとする事が謙遜なる誇である。

神は私を特別に愛し給うて、私は普通の人々より少し計り多く苦しんだ。殊に私は罪に悶えた。之は苦しい事である。此の惱こそ神が私を特別に愛し給ふたからであつた。神に偏頗がありやう筈がない。己を人以上に罪人と思ふことに何の誇があろう。然かも神はかゝる者を神の御用のため、日本のために、世界のために必要と見給ふたのである。之が私の謙遜なる誇である。

祖父の書翰（九）

江原 萬里

かやうに、祖父は藩主に再び上書して、征長の不可を論じ、京都を中心に國家を統一し、以て泰西諸國の侵略を防止する事が藩政の大方針たるべきことを熱心に論じたが、此の意見を彼は管に藩主に説いたのみではなかつた。此年京都に於て板倉及び小笠原兩侯に面謁して之を説き、江戸にて再び板倉侯に、又酒井侯に説いた。彼は又諸藩の同志と相交り、此等と互に肝膽相照し、國事に盡粹するところがあつた。

此等の志士中、わけでも祖父と親交のあつたのは、姫路藩の河合惣兵衛であつた。彼との交際は、文久二年祖父が二十八歳の時、始めて津山藩に召出され、直ちに國事周旋掛として、京都に駐在を命ぜられた時に始まり、日尚ほ淺く僅に二年にして惣兵衛の死に由つて終つたが、性行相均しく、主義亦相同じく、兩者の交情は甚だ濃かにして、互に死生相誓ふた。

然るに翌年、即ち文久三年、前に述べたやうに勤王運動に反動が生じ、幕府の勢力が再び盛となつて、諸國の勤王

の志士は續々捕へられて處刑された。河合惣兵衛も亦此の年姫路に幽閉せられた（赤穂藩の十三人が脱藩して長州に走つたのも此の年の事である）。

祖父は親友の幽閉の報を聞き、大に心痛し、藩主酒井侯に面謁して、惣兵衛の赦免を乞ふた。然るに酒井侯は當時幕府の閣老を勤めて居て、職責上之を許すわけにゆかなかつた。祖父はその翌年即ち再度征長不可を論じた元治元年に、酒井侯に上書して再び惣兵衛の赦免を願つた。

祖父は此の書に於て、先づ酒井侯は徳川家と休戚を同じくする家柄なれば、今回閣老としての就職は御尤千萬なれど、其任の甚だ重き事に同情する旨を述べ、次て彼は時勢を論じて「外には夷狄陸梁、皇國併呑の實有之、内には義勇憤死、天下分裂の形有之」る事を述べ、今大反動が到來したが、然し天下の大勢は勤王、攘夷にある事は明である。爲政者は此の大勢に抗すべからず、之を施政の方針として國政を掌るべきである事を述べ、此の事は

私は迄、閣下初め奉り、周防守様（板倉侯）杯にも言上の次第、語辭簡繁の相違有之候得共、皆尊王攘夷の意にして、惣兵衛殿の言上も相違有之まじく奉存候。

然るに言上毎に理義尤の山仰下され候。然らば、惣兵

衛殿の忠貞慷慨、先年來勤苦周旋御國光相増され候義
固より御喜悅在らせられ候義は恐察し奉り候。

それなのに何で、今惣兵衛を捕へ、之を刑に處しやうとするのか。惣兵衛に何の罪がある。一體憂國攘夷の士は、多くは慷慨悲歌の徒、憤激の餘、亂暴を働く者も少なくないが、

惣兵衛殿の沈靜敦厚、君臣の情義厚く、事情暗熱、疎暴の舉動無之候は私固より承知仕り候。唯小疵と存候處は、不義不忠の人に對して一點の假免無之候より、或は常人の讒言を招き候。

爲めに罪を得たのか、若し然らば、惣兵衛自身は禍害を蒙る事を意としないであろうが、若し讒言のため罪を得たものならば、それは却つて主君の不明を表はす事となる。

多分彼が幽閉された直接の理由は、京都にて御供先を脱走した事であらう。然るに之は主家が勤王黨の人々の間に不評を極めて居たから、惣兵衛は一己の身にても天下に盡力し、主家の恥辱を雪ぎ度、所存から出たものである。惣兵衛に何の罪はない。之を赦せ

今勤王の志士の間には、酒井侯は閹老となられて、我々天下の有志の者共を盡く驅取る考にて、先づ領内から其の

手始をされるとの風説がある。若しかやうの世評を蒙られては天下の義勇憤死の徒がどんな狼藉を仕出かすやも計り難い。自分の取越苦勞かも知れないが、此の非常時に當り何卒殊更に人心を動搖させないやうに御願致し度い。自分は感激するに忍びず、不測の嚴誅を冒して之を言上する次第である。若しそれ惣兵衛との交誼の一事は別紙を披見され度しと云ひ、

伏て願はく、眷々の寸衷、御賢察在らせられ、歎願の義御許容被成下候は、難有仕合に奉存候。

之が彼の親友惣兵衛のため、その命乞の歎願書であつた。事理と禮儀とを盡し、國を憂ひ、友の身を思ひ、又先方の位置を考へ、熱情と至誠とを披瀝したものである。然るに前にも述べたやうに、酒井侯は閹老の職責上、先づ自藩の勤王黨より鎮壓する方針を取り、惣兵衛を處刑した。祖父の遺憾は此上もなかつた。

越えて二年、即ち慶應二年、祖父は河合未亡人に宛て、次の手紙を書いて居る。言々句々、友の不運と後に淋しく遺されたその妻の身の上に同情し、之を慰めやうとして居る彼の心情のやさしさが此の書に溢れて居る。私は祖父の書

翰中、情の人としての彼を知らしめるものとして、最も之を珍重する。

(前略) 私事去る六月、にわかに出府申付られ、十二日出立、十三日御當地通行致しながら、同道人も有之誠にいそぎ候旅なれば、御伺も申上げず、其の節灰や庄八へ申ふくめおき候間、定めて御くみとり下され候と奉存候。來年六月まで詰のところ、前將軍様の御法名をもち、國に歸り候よふに申付られ、またにわかには江戸表去る二十三日出立、今夕兵庫にとまり申候。

(中略) また、御伺ひ申上げ候事も相叶はず、せめては旦那様御墓所までも参詣いたし、當時のなりゆきも、くり事ながら申上度、いつぞの存念もと、くるやうと案じ候所に御座候。

扱て去年下され候御書中のおもむき、くりかへし御心中の程御さつし申上、失敬ながら袖をぬらし申候。かねて御國の爲めには、ともに枕をならべて打死と御ちかひ申上おりに、御不幸とは申しながら、悪人の姦計にて、御先立なされ、おめ／＼のこる私心中、幾重にも御推察下され度く。(中略) ちかころ候候事共一つとしてよろしき事なく、夷人の世界に相成り、もは

や、われ／＼風情のいきのこり候ものも、死が近より申候とおぼえ申候。みぎらの事共、御面會の上いろ／＼御はなし伺ひ度存候へ共、不相叶には仕方も御座なく候。

さて先達申上候て、御父子様御法名は承知仕候へ共、御日を承知不仕、かねて庄八へ頼みおき候へ共、知らせ不申、何とぞお使も御座候はゞ、御知らせ下され度奉願候。なにか江戸表の土産をも、さし上度奉存候へ共、にわかの出立、ととのへ候ひま無之、これは誠に廉末ながら、旦那様にはかねて御風味成され候事のへ進呈仕候。御靈前へお供へ下され候はゞ、難有奉存候先は時節御伺ひかた／＼みぎのよし申上候 以上

十一月五日夕 兵庫にて認申上候

親友とその亡き跡を思ふて、涙なくしては書かれず、又之を受取つた未亡人は涙なくしては之を讀むことを得なかつたであろう。彼は決して奸悪邪智でなく、又片苦しい道義者でもなかつた。人に對して情の濃かい人であつた。

身邊漫筆

○新緑の初夏は紫紅亂開の春よりも美ほしい。新生命が漲つて居る。我等がキリストに由つて得たる新生命と相響應する。今は樹陰散策によく、讀書によく、仰いで神の御國を偲ぶによい。世は暗澹、議會は農村救済を絶叫し、朝野喧嘩甚しい。一體疲弊せる農村が議員の投票で救済されると思ふのであるか。

○私如きは世の活動家から見れば無爲無能の標本である。若し人間の活動が地表を馳けつり廻つた里程、集め得た小紙片上の數字の高で計られるならばそうであらう。然し乍ら私は決して無意味に生きて居ない。凡そキリストを信じ、神を父として拜する者は、人間一個の靈魂がキリストに在つてどれだけ父なる神に價值があるかを悟る。此の事を知る事が人生の最初であり、眞中であり、最終である。行詰まつた世の打開はこゝからである。

○それ故私は聖書の眞理を發行するためだけに勞し、祈つて居るかわからない。之が私の生活の殆ど全部である。或る人は何故生活の資にならない此の仕事に一生懸命になるかを不審に思ふ。あゝ人よ、「我には汝らの知

らぬ我が食する食物あり」(ヨハネ四章)

○私には今一つ仕事がある。毎月一回の宅の小集會である。私はその月中に研究し、思索した精髓を傾注して居る積りである。数日前のこと、集の人々が相寄つて、私の話は面白いが、聖書の眞理の私の文章は面白くない。集の話の速記して夫を載せた方がよいと話合つた由、眞理誌主筆先生は上つたりだ。

○私の文章は悪文である。然し乍ら、聖書の眞理は全く乾燥無味ではない。私は度々讀者からの手紙で慰められ、勵まされて居る。最近來た小栗葉三君の手紙の一節に、

愉快な報告をします。それは先月號(五月)を持地夫人に進呈しました所、千葉縣の講演會に行く途中の車中で讀み乍ら行つた所出迎に來た校長さんが眞理を手にして讀み耽り返へさなかつたので、讀み度いかと尋ねた所、非常に興味を持たれて居たので其の儘與へて來たとの事です。心ある人は裏心に於て矢張り聖書の眞理を求めて居るのです。見えざる所に御手は働いて居ます。

○最近横濱の一勞働商人から次の手紙を受取つた。本誌は著名の學者や實業家にも讀まれて居るが、こう云ふ「無學の職人」に愛讀さ

れて居る事は私の無上の喜である。

誠に先生にお會ひませんが其誌を愛讀さして頂て居一人ですが、何日お面會致したく主に祈つて居ます。それ外でなく一度お會申て、頂た喜びを面の當りに出したく居ります。創刊以來の嬉がつもり積つて居故です……身邊漫筆に到つては眞實他人と思はれず感じ候。同時に先生の胸中を私と共に見て下さいました其の無限に打れ候。……

若し其等の中に在る只一つの事だけを實際に活用云々、それで私し願ひは満足云々、それを教えて頂いた先生の貴さ、その雜誌は生命の言を示して下さる雜誌故、人がモクシテモクスルにしのび(す)、永年のごん人の一言を無學なるをかいり見ず、早々。主許し給はば參ります。何卒お曹ひ下れ度候。

無學の職人

○讀んだ私の眼には涙があつた。私は最近度々靈魂の熱烈なる欲求を有つ人々の訪問を受ける。此等の人には、此の世に時めき又衣食に足つて、此の世限りの欲求しか有たない人々に全く感じられない來世の存在を明白に看取し得る。聖書の眞理はこう云ふ種類の人々に最も強く訴へるやうだ。

内村祐之譯 (岩波版)

天才人

定價 二圓七十錢
菊版クロース装

本書は各種天才の性格を精神病理學の見地から觀察批評したものである。天才と狂者との類似點及び相違點、兩者の遺傳的關係等の叙述に甚だ興味深い。天才は如何にして世に出るか、其の背景如何、天才の種々相等につき、觀却され易き方面を明にして居る處に本書の價值が多いと思ふ。原著者クレッチュメル教授は精神病理學者、譯者も亦北海道帝大の精神病理學の教授。内村先生の嗣子。譯文甚流麗。譯者より主筆の妻に宛てた書翰一筋に今度父の二週年を記念する意味でつまらない翻譯をしました。一部御送り致します。預言者の一章は小生の父の性格と照し合せて眞を穿つて居ると思ひます。御批評下さい。

持地ゑい子著 (獨立堂版)

デンマーク見聞記

定價 三十錢
送料 四錢

我が國無用の急として農村救済が叫ばれて居る今日、眞に農村が救済された實例を知らんとせば、デンマークを見るに若かず。嘗て戰敗の荒蕪地を世界の模範農村としたのはグルンドウキヒの信仰であつた。昔三里バタと稱せられ、惡臭村落の遠近に漂ふたバタが今では倫敦市中で最良品として販賣されて居るとの事である。本書は著者が今では世界的に有名となつた國民高等學校に寄宿して親しく此等の事實を見聞した記録である。

江原萬里著 (聖書の眞理社)

聖書の現代經濟觀

定價 一圓二十錢
送料 八錢

一人で五十十部を購つて知人に贈つて居る人が數人あるやうだ。目下の不況に行惱む人々にして本書に由り力づけられ、著者に感謝を寄せられる者が殆ど毎月ある。

聖書の眞理定價 (送料共)

一 部 二十錢
半年六部 一圓十錢
一年(十二部) 二圓十錢
海外一年 二圓六十錢

拂込は聖書の眞理社 (振替東京六三三七五番)へ。獨立堂にてよし。

思想と生活合本。

第一卷 二、〇〇
第二卷 一、八〇
第三卷 二、三〇

聖書の眞理合本。

六年度 二、五〇
送料不要

四部注文の場合は六圓に割引す

昭和七年五月廿六日 印刷納本
昭和七年七月一日 發行

神奈川縣鎌倉町扇ヶ谷三四三

編輯印刷 江原萬里
兼發行人

發行所 聖書の眞理社
東京市外澁谷町向山九七

印刷所 共榮堂印刷所
東京市外澁谷町向山九七

發賣所 獨立堂書房
振替東京六四六八番

(昭和三年二月十六日)
第三種郵便物認可

聖書之眞理 第五十七號

昭和七年七月一日發行
(毎月一日一回發行)

本誌定價二十錢